

SY8-5**令和6年能登半島地震における中学生の集団避難からの提案－災害時の小児を守る医療と教育の連携に必要なコーディネーターの役割－****森 慶惠**

金沢大学 人間社会研究域 学校教育系

このシンポジウムでは、令和6年能登半島地震における中学生の集団避難の取り組みを報告し、その成果と課題をもとに、災害時に子どもの安全と健康を守るために医療と教育の連携のあり方を提案する。そして、具体的な方策について議論していく。【中学生の集団避難の背景と実施】令和6年1月1日に発生した能登半島地震は、震度7を記録した地域を中心に甚大な被害をもたらした。公立小中高校の85.1%が被災し、学校設備の損傷や避難所利用のため、多くの学校が休校を余儀なくされた。このような状況下で、安全な学習環境を確保するために、被災地域から離れた3か所の施設に約850名の中学生を集団避難させる取り組みが行われた。この避難は、家族と離れる形で希望した一部の生徒が参加する形式であり、前例のない試みだった。【集団避難から得られた成果と課題】集団避難により、安全な環境での日常生活が再構築され、生徒の心理的安定や学習機会の確保に大きく貢献した。さらに、教員や養護教諭が同行することで、健康管理や教育支援が行われ、生徒たちは「安心できる居場所」を得ることができた。一方で、家族と離れることで不安や孤独感を抱え、新しい環境に適応するのに苦労する生徒も多く見られた。また、支援にあたる教員自身も被災者であり、心身の負担が大きく、現状を分析して必要な支援を要請する余裕がない状況も生じた。これらの課題から、子どもと支援者双方へのサポート体制が十分とはいえない点も明らかになった。【今後の災害対応における医療と教育の連携の進め方】これらの経験から、災害時に子どもの安全と健康を守るために、医療と教育の連携を調整する「コーディネーター」の存在が不可欠であることが示された。コーディネーターは、多職種の連携を円滑に進め、教育現場の声を拾い上げて、必要な支援を子どもと支援者につなぐ役割を担う。具体的には、避難施設での健康状態やニーズの把握、医療チームとの連携、感染症対策や心理的ケアなど、現場での課題に迅速かつ適切に対応することが求められる。文部科学省は、令和6年能登半島地震を踏まえ「災害教育支援チーム（DEST：Disaster Education Support Team）」を提唱している。今回の集団避難の成果と課題をDESTの枠組みに反映し、現場支援を担うコーディネーターを組み込むことで、医療と教育の現場で効果的な支援を実現する仕組みを構築していくことが重要だと考える。